教師は労働能力を生産するか？

——教師聖職論批判のために——

井　上　　康

Does a teacher really produce of labor power?

INOUE Yasushi

はじめに

教師の労働をいかにとらえるべきかについては，従来種々に論じられてきた。しかし，これらの議論は概ね大きな混乱の中にある。混乱は次の三点に於て特に著しい。

㈠，近代公学校体制成立以降のその体制下での教師の労働（特に公務員の）と，その体制[1]成立以前の教師の労働や学校資本の下でのそれを特に分析の方法論上区別しえていないこと。㈡　経済学的にまず分析すべき学校資本の下での教師の労働を資本の生産過程において分析するとき，労働過程と価値増殖過程との統一としてとらえていないこと。㈢．㈡の場合，商品・価値論領域で，労働力と生きた労働との，生きた労働と商品で表示された労働との，生きた労働の二面的属性，商品で表示された労働の二重性等の区別につき手のつけられないような混同があること。

これらの欠陥は相互に入り混ってあらわれているが，こうした欠陥を一旦取り去ってみると，論者には共通に，教師は労働能力（それを労働力商品でしかないと言おうが，労働力商品としてあらわれるがしかし人間の人格的諸力の形成だと言おうが）を生産するのだという牢固たる常識があらわれる。

だが，教師は本当に労働力を生産するのか？この点が批判的に検討されねばならぬ。

Ⅰ　分析方法上注意すべき三つの点

第一。分析対象を資本の下に形態的にのみならず実質的に包摂された[2]教師の労働に限定すること。このことは第一に，近代公学校体制下の公務員労働者たる教師の労働を，また第二に，資本の下にただ形態的に包摂されただけの教師の労働，あるいは資本の下に包摂されないそれ，を分析対象としないということを意味する。とくに経済学的には近代公学校体制下の教師の労働からはまず切り離して資本の下でのそれを明らかにし，しかる後にその質的変化を近代公学校体制の把握によって明らかにすることが必要である。人はたいていこれとは逆のことをやって，眼前の近代公学校体制を帝国主義段階特有のものとして把握しえず，つまり産業資本主義時代の種々の「教育工場」[3]からの質的飛躍を明確にしえず，それ故今度は教師の労働について経済学的に明らかにしようとするときには眼前の近代公学校体制の圧倒的現実性に惑わされて，所謂古い資本主義の諸範疇と帝国主義段階の諸範疇とを混同し，非論理的なまぜものをつくっているのである[4]。

また他方，分析対象を，資本の下に包摂されない例えば家庭教師の労働や，資本の下にただ形態的に包摂されたに過ぎないそれ（例えばマルクスのいう「教育工場」）とはしない点については改めて言う必要はなかろう。

第二の方法上の注意点は，資本の下に実質的に包摂された教師の労働を分析するのだから，あくまで資本の運動においてそれをみなければならず，生産過程も資本の生産過程として，労働過程と価値増殖過程との統一としてとらえねばならない，という点である。

教師や医師の労働は眼にみえ手に触れうる所謂物的商品を生みださないから価値―剰余価値を生みださないと考えている俗物経済学者の説はともかく，教師や医師の労働はサービスという所謂非物的商品を生みだし，価値―剰余価値を生産すると主張している人々も，この点では大きく混乱している。人々は往々にして労働過程と価値増殖過程とを恣意的に分断し，あちらではあれ，こちらではこれという具合にバラバラに勝手な解釈を積み重ねているのである。赤堀が正しくも一方で，サービスなる所謂非物的商品を生産していると言いつつ，他方で同時に労働力を生産していると主張するのもこの混同のあらわれである[5]。

さて第三に。しっかりとした商品―価値論によって分析を貫くこと。もっともすぐれた主張をしている一人である赤堀でさえ，商品で表示された労働の二重性についてはっきりした理解をもたず，それ故生きた労働と商品で表示された労働との，また商品で表示された労働の二重性と生きた労働の二面的属性との区別を明確にしえず，価値実体を生きた労働の抽象的人間労働属性に還元してしまっているのである[6]。

Ⅱ　学校資本の下での教師の労働

先ず従来の見解への批判として，私の積極的主張を述べておこう。

学校資本の下での教師の労働は，資本主義的商品を，従って価値―剰余価値を生みだす。この限りでその教師の労働は，資本の立場からみて生産的労働である。

その商品は知識・規律等からなる教育サービスという所謂非物的商品であって，所謂物的商品と何ら変わりなく使用価値と価値という二重の対象性をもつ。まず使用価値としての対象性であるが，それは成程所謂物的商品とひどく異なるとはいえ，しかし明らかに教師の生きた労働そのものとは厳密に区別されうる一つの対象的存在である。それはやはり教師の生きた労働の結実，支出の結果である。他方，価値対象性としては何の特異なところはない。

さて，この商品の生産過程（学校資本による労働過程と価値増殖過程としての）は次のようである。

まず労働過程からみると，労働そのものは言うまでもなく教師の労働，つまり授業等である。労働手段は教室，運動場，種々の教材等である。最後に労働対象であるが，ここが所謂物的商品生産の場合と異なる。つまり学校資本の生産過程では労働対象はそれとして存在しないのである。この点は医師の労働や歌，踊り，演奏等の労働に共通することであり，マルクスの言葉で言えば，「蚕が絹を生みだすよう」[7] な，それらの労働者の「天性の発現として」[8] の労働である。

他方，価値増殖過程からみると，旧価値（不変資本部分の補塡，維持）は，諸労働手段の価値である。労働対象がそれとして存在しないから，不変資本の可除部分たる労働対象の価値部分は当然存しない。新価値（可変資本部分の補塡プラス剰余価値）はもちろん教師の諸労働力価値プ

ラス剰余価値である。

では生徒とは何か。生徒は生産された教育サービス商品の購買者であり，消費者である。だから次の点が注意を要する。

第一に，この商品の生産過程，第二に，学校資本によるこの商品の購買者＝生徒への現実の譲渡の過程，第三に，購買者＝生徒によるその商品の消費過程，というこの三つの過程が場所的時間的に同一に遂行されるという点である。この際立った特徴は実に様々の誤った見解を発生させる根拠となっている。その最たるものが教師は労働力を生産するというものである。

以上が私の主張の核心であるが，従来の諸説との関連で以下の点につき詳述する。

(1)，労働生産物（教育サービス商品）について

(2)，商品で表示された労働と生きた労働との区別について

(3)，労働対象がそれとして存在しない点について

(4)，先の三つの過程が場所的時間的に同一に遂行される点について

(5)，労働力を生産するという謬論について

(6)，生産的労働論争について

Ⅲ　学校資本の下での教師の労働が生みだす生産物＝商品について

金子ハルオや芝田進午らは，価値をもつものとしての商品を所謂物的生産物においてしか認めず，教師の労働は所謂物的生産物を生みださないから価値―剰余価値を，従って商品を生産せずと主張する[9]。こうした主張の背後には，“もの”に対する俗物的理解がある。従ってまず“もの”についての理解をはっきりさせておく必要が生ずる。

我々が普通“もの”というとき，それは手にとることができ眼でみうるような“もの”，固体や液体である。この場合は何のわかりにくい点はない。Material である。

だが，マルクスは“もの”を更に無形の“もの”，“事がら”等の意味を含めて使っている。Ding や Sache である[10]。明らかにそれらは所謂非物的商品を含むものとなっている。このブルジョア社会では富は厖大な商品集積としてあらわれているが，この富についてマルクスは次のように言っている。

「……富とは，一方で物〔Sache〕であり，人間が主体としてそれに対立する物〔Sache〕，物質的生産物〔materiellen Produkt〕のなかに現実化されている。他方では富は，価値として，支配することを目的とせず，私的享楽等を目的とする，他人の労働にたいするむきだしの命令権である。すべての形態において，富は物という姿態〔dinglicher Gestalt〕であらわれる。それが物〔Sache〕であろうと，またそれが個人の外に，個人とならんで偶然に存在する物〔Sache に媒介された関係であろうと，そうである。」[11]

このようなマルクスの“もの”に対する考え方を金子や芝田は理解せず，全く俗物的な見解を抱いているわけである。

このように所謂非物的な〝もの〟の対象性が生きた労働とは明確に異なるからこそ，かかる生産物がレコード，テープ，映画，テキスト等に固着されることもあるのである。

では，金子らを批判する赤堀はどうか。

金子ハルオらが所謂物的生産物を生産する労働であることを生産的労働の一契機だと主張した

のに対し，赤堀は生産的労働とは「資本のために直接，剰余価値を生産する労働」[12] 以外ではなく，「ある労働が生産的労働であるかないかは，労働生産物の素材的性質とは全然関係がない」[13] と主張し，ここから所謂物的姿態をとらないサービスのような所謂非物的商品が存在し，そのような商品を資本の下で生産し，資本を直接に増殖するサービス労働を生産的労働だという。この主張は全く正しい。

ところが，この展開から知られるように，赤堀は商品価値を考える際に，その商品の素材性を混入すべきでないことを述べているだけであって，金子らの〝もの〟理解そのものに批判を投げかけているわけではない。つまり赤堀は所謂非物的商品の使用価値対象性については検討しないで，金子らの〝物〟に対してただ“非物”を対置しているに過ぎない。

だが，こうした点をもうすこしつっこんで考えてみると，金子にせよ，赤堀にせよ，商品で表示された労働の二重性について明確な理解をもっていないということがわかる。

赤堀はいう。

「労働の物質化としての商品について，労働の物質化ということを，その交換価値という意味でも，具体的労働の結果としての使用価値という意味でも，スコットランド人的にとらえるべきではない，労働が商品にその痕跡をすこしも残さないことがありうる」[14]

これはマルクス『剰余価値学説史』第一巻の次の部分に関していわれていることである。

「労働の物質化等々を，A・スミスがとらえているようにスコットランド人的にとらえるべきではない。われわれが労働の物質化としての商品について――その交換価値の意味において――語る場合には，このこと自体は，商品の想像的な，すなわち単に社会的な，存在様式にすぎないのであり，これは商品の物体的な現実性とはなんの関係もない」[15]

マルクスが，「その交換価値の意味において」と明記しているように，ここで言われている労働の物質化とは，商品で表示された二重の労働のうち，価値実体たる抽象的人間労働についてのことであり，決して他方の具体的有用労働のことではない。赤堀はこの二重の労働を混同している。

ところでマルクスは，今引用したように，商品で表示された抽象的人間労働について，労働の物質化をスミスのようにとらえてはいけないと述べた上で，更に，一方の商品で表示された具体的有用労働についても，必ずしも手にとることができ眼にみることができるものとしてあらわれるとは限らないというのである。先の引用直後の次の一文である。

「その成果として商品を生みだす具体的労働が，商品にはその痕跡を少しも残さないということはありうる」[16]

商品で表示された抽象的人間労働と具体的有用労働というこの二重の労働が全く次元の異なる対象性であることを赤堀も金子もわかっていない。金子の場合は，両者を手にとり眼でみることのできる対象性のうちに還元し，所謂物的生産物でないと価値対象性をもたないと考えているわけであり，他方，赤堀は両者を〝非物〟のうちに還元しているのである。この赤堀の場合，ここから更に商品で表示された労働と生きた労働との混同を生じさせている（この点はⅣで）。

以上からわかるように，金子，芝田にせよ赤堀にせよ“もの”に対して誤まった考えを抱いていたのであった。この点の理解を明確にし，これに伴って商品で表示された労働の二重性をはっきりと区別しうる限り，教師のような労働もある“もの”を生産していること，それが資本の下

でなされる限り，商品としてその“もの”の対象性とは区別されうる価値対象性をもつことは明らかである。

Ⅳ　商品で表示された労働と生きた労働との区別について

教師の労働が商品を生産することが明確に把握されれば，商品で表示された労働と生きた労働との混同は容易に防ぎうる。

いかに所謂非物的商品であれ，一つの対象性として“もの”である限り，その“もの”に表示された労働の具体的有用的性格を捨象した労働＝抽象的人間労働が，所謂物的商品と同様に対象的に把握されうるのであり，それが価値の実体であること，これまた所謂物的商品と変わらないのである。

赤堀はせっかく所謂非物的商品を認めながら“もの”について明瞭な理解をもたなかったが故に，商品で表示された労働の二重性をはっきりと把握しえず，ここから商品で表示された労働と生きた流動状態の労働とを混同し，かくして価値の実体を商品で表示された抽象的人間労働として厳密に把握しえず，それと生きた労働の一属性たる抽象的人間労働の属性と混同することとなったのである。

教師の労働の場合のように，対象化された労働が手にとることができ眼にみることのできる対象性をもたないことが，商品で表示された労働と生きた労働との混同をとりわけしばしば発生させるのであり，その結果，商品で表示された労働の二重性と生きた労働の二面的属性とを混同させるのである。

生きた労働そのものは決して商品ではなく，価値をもたない。それは生理学的意味での，また具体的な，特殊な目的をもった労働力の支出行為そのものでしかない。

Ⅴ　教師の労働においては労働対象がそれとして存在しない点について

『資本論』第一巻第三篇第五章第一節の労働過程でマルクスは，「労働過程の簡単な諸契機は合目的的な活動または労働そのもの，それの対象，およびそれの手段である」[17]と述べた。

だが，教師の労働ではこの労働対象がそれとして存在しないのである。このような特徴をもつのは医師の労働，歌，舞踊，演奏等の労働にも共通する。またやや性格を異にするとはいえ，運輸・通信業，宿泊業，いくつかの所謂レジャー産業等においてもやはり同様のことが言える。

もちろんこれらの場合，労働対象をある種の＜空間＞といえないことはないし，とくに運輸・通信業等の場合，そのように規定する方が適切なのではあるが[18]，ともかく，労働対象についてのこの特徴は，不変資本の可除部分をなさないということ，及び労働生産物が所謂非物的商品となるという点と結びついている。

更に，運輸業，宿泊業等を除いた，労働対象がそれとして存在せず，「蚕が絹を生みだすよう」な労働の諸部門では[19]，労働者の種々の資質等にその労働過程が大きく規定されざるをえないということによって，労働の対象的諸条件と「自由な労働」[20]との分離はより困難であり，相対的剰余価値を生産する個々の特殊な生産方法の発展はより困難であり，資本の下への賃労働の実質的包摂はより困難である。だから，これらの部門の労働者が多くの点で，独立小商品生産者と同様の意識を持つという傾向が生みだされる。

この傾向は，帝国主義段階以降，これらの部門が資本の下に実質的に包摂され，独占が成立し，

それに照応して弱小資本ないし独立小商品生産者の厖大な層が新たに形成され構造化されることによって，なお一層強まる。

ここに教師や医師の労働を聖職だと考える根拠の一つがある。

さて，ここでは更に，これらの労働をそれぞれ分析し，教師の労働の分析の補助材料としたい。

当該産業部門を便宜上次のように分けることができよう。

(1)，歴史的にみて主に貴族等へのサービスとしてあった部門。これが形態的に，そして次第に実質的に（とくに帝国主義段階以降）資本の下に包摂されたもの——医療，所謂芸術関係。

(2)，歴史的に(1)と同じように主に貴族等上層諸階層へのサービス部門としてあり，後に資本の下に形態的に包摂されたが，世界資本主義の帝国主義段階への移行とともに近代公学校体制という特殊な形態をとるにいたったもの（本編で問題としている種々の学校資本は実にこの近代公学校体制にくみこまれたものであるか，あるいはそれを前提とするものである）。

(3)，歴史的にみて小商品生産形態でのサービス部門から発展してきたもの——宿泊業，運輸業，通信業，出版業，部分的に医療，教育部門。

(4)，独自に資本制生産の下で，とりわけ帝国主義段階以降発展してきたもの（しかし(1)や(3)に発生の芽はある）——所謂マス・コミ，種々の娯楽産業部門。

(1)の場合をまずみてみよう。歌手や舞踊家，演奏家は，やはり「蚕が絹を生みだすように」彼らの生きた人格の中に宿る創造的素質を表出する。つまり唱い，踊り，演奏し，かくしてその行為＝生きた労働とは一体でありながら概念的には区別されうるし，されねばならない対象性たる生産物——歌そのもの，踊りそのもの，演奏そのもの——を生みだす。楽譜，衣裳，楽器，照明，舞台等々は労働手段として役立つ。

ともあれ，彼らを雇って一儲けしようとする（直接に剰余価値を取得しようとする）資本家からみるとき，労働諸手段の価値と，それとは区別されうる労働対象の価値へと不変資本部分が分たれることはない。

次に医療はどうか。この場合，医療資本の下での賃労働者（医師，看護婦等）が商品（医療サービス）の購買者であり消費者である患者と直接に交渉を持つという点の理解が問題である。このことが一見すると，この生産過程における労働対象が患者であるかのような混同を生じさせる。しかし，そもそもこのような労働が字句の本来の意味でのサービスから発展し，資本の下に包摂されたのだという点をしっかりおさえておくならば混同は避けうる。今日の医師や看護婦はサービス提供者の発展した形態の下でのそれ以外ではなく，患者はあくまでサービス受益者なのである。ここでは，医師や看護婦が患者と直接に交渉をもつ——検診する，口頭でいろいろ容態についてやりとりする，手当てをする，手術をする等々——ということも何ら事態を変化させない。歌手がその歌によって聴衆の耳に直接に働きかけるように，医師は患者の体に直接に聴診器をあてるわけであり，また道化師が王や貴族の顔色をうかがいつつ芸を演じたと同様に，医師は患者の顔色などを慮るのである。この場合もやはり労働対象はそれとして存在せず，生みだされる商品は医療サービスという所謂非物的商品なのである。

ところで，この商品の生産過程を価値増殖過程からみるとき，患者があたかも労働対象であるかの幻想は完全に吹き飛ぶ。つまり，もし患者が労働対象であれば，その考え方に従えばそれはマルクスの言う原料[21]であるはずであるから，一体その不変資本としての価値はどうなったのか，

と問えばよい。医療資本と患者との関係は，明らかに生産された商品の販売者とその商品の購買者・消費者の関係である。医療資本にとってはだから W→G であり，現実にそうである。もし患者が労働対象ならもちろん不変資本部分への投下として医療資本からみて G→W を構成しなければならぬ。

もう一つの決定的な問題があるが，それは次でみよう。

次は本稿で扱っている学校資本の下での教師の労働である。この場合，先の医療資本での規定が同様にあてはまる。教師と生徒の関係は医師と患者の関係と全く同一である。生徒の頭脳等は決して労働対象ではない。「学校教師は，児童の頭脳を加工する」[22]というマルクスの言葉は，例えば先にあげた歌手の労働等で歌手がその歌によって聴衆の音楽に対する＜耳＞をきたえる，育てる，加工する等と同じこととして理解されなければならない。教師がいかに児童の頭脳に加工しようとそれを生産活動だと呼ばないのは，芸術家がその作品によって人々のやはり頭脳を加工し，感性，鑑賞力等を育むからといってそれを生産活動と呼ばないのと同様である。そこには流通過程が介在しているのである。

こうして芝田の「教育労働は，この物質的自然そのものを変革するところの自然，すなわち，もっとも高度に発展した自然である『人間的自然』（人間性）を労働対象とする」[23]という主張のデタラメさがハッキリする。

このように，従来言われている教師は労働力を生みだすという主張の誤りは，労働過程からみてさえ明白である。更に価値増殖過程からみればそれがより一層際立ってくる。先の医師の労働の場合と同様，労働対象が児童の頭脳とするなら不変資本価値はどうなるのかを考えればよい。学校資本は生徒から授業料を教育サービスへの支払いとして徴収するのであり（W→G），決して不変資本部分への資本投下（G→W）を行なうのではないのである。

今一つ決定的な点。もし生徒の頭脳が労働対象であり，労働力商品が生産されるとするのであれば，その労働過程が資本の生産過程の一契機である限り，次の二つの結果が生ずる。第一に。「労働者〔教師〕は，彼の労働の帰属者たる資本家〔学校資本〕の下で労働する」[24]。この点はよい。次に第二に，、「生産物〔労働力商品〕は資本家の所有物であって，直接的生産者たる労働者〔教師〕の所有物ではない」[25]。生産物たる労働力商品は当然にも学校資本の所有物とならねばならない！　しかも資本はこの商品（剰余価値を含む）を売り，現物形態の資本を貨幣形態の資本に転態せねばならない。つまり学校資本は労働力商品販売人となる。奴隷商人となる!!

こうしたバカバカしい結果は労働対象を生徒の頭脳等とするところに発しており，更に資本の生産過程を労働過程と価値増殖過程との統一としてきちんと分析しないことによっているのである。

次いで(3)，(4)の部門についてだが，これは(1)，(2)とかなり性格を異にするのでここでは省略する。

Ⅵ　商品の生産過程，その商品の現実の譲渡過程，更にその商品の消費過程が場所的に同一で時間的に同時である点について

この著しい特徴は，Ⅴで述べた部門に大体共通する。これら三つの過程を厳密に概念的に区別することが，教師の労働を正しく理解するための最大のポイントともいえる。人はたいていこの

三つの過程を混同し，生徒を生産過程の中に混入させ，それを労働対象としたり労働手段としたりしてしまうのである。

医師の労働でみたように，教師が生徒と直接に交渉をもち，応答したり等することが余計にかの混同を生じさせるわけであるが，しかしそういった行為は言うなれば市場調査の一種に他ならないのである。

Ⅶ　教師は労働力を生産するという謬論について

今まで述べてきたⅢ～Ⅵによって，教師は労働力を生産するのではなく，知識や規律等からなる教育サービスを生産し，購買者・消費者たる生徒にその商品を直接手渡すのであることが明白となった。

ここでは労働力生産説がマルクスの恣意的解釈から不断に発生してきていることに鑑み，マルクスが教師の労働等についてどのように考えていたかを述べ，更に従来の生産的労働論争についても簡単にふれたい。

ここではⅤでみた(1)と(2)，即ち教師，医師，歌手等の労働について考える。

これらの部門についてマルクスは主に二つの領域でふれている。第一は，労働力価値に関するところであり，第二は，生産的労働と不生産的労働との違いに関するところである。

まず第一の部面。これについては『資本論』よりその草稿に興味深い叙述がある。

「労働者は，ある特定の労働能力を発達させるためには，自分の一般的な天性を変化させて，それがある特定の労働を実行できるものとなるようにするためには，なんらかの訓練または授業を，なんらかの教育を必要とするのであるが，この教育は，彼が修業する生産的労働の特殊的な種類に応じて，あるいは多く，あるいは少く彼自身によって支払われなければならないのであって，これがまた労働能力の生産費にはいるのである。この最後に考察した点は，特殊的な労働諸部門のさまざまの価値を展開することが問題になるときにはどんなに重要になるとしても，ここではまったくどうでもよいことである」[26]

このただしがきに照応して第二の部面での分析があるとみたいが，ここで捨象されながらもこの問題意識に従って次のようにいう。

「労働能力の価値は，労働者が自分を労働者として維持し，労働者として生きていき，繁殖するため必要な生活手段の価値に帰着する」。この「生活手段は，すべてもろもろの商品に帰着する」。ところでこの「労働能力の維持に必要な生活手段の価値は変化するが，しかし，それはつねに，労働能力の維持および再生産に必要な生活手段を生産するのに必要な，あるいは労働能力そのものを維持あるいは再生産するのに必要な労働の量によって，正確に測られるのである」[27]

問題は最後の引用の「労働能力そのものを維持あるいは再生産するのに必要な労働の量」という部分であり，この表現は，『剰余価値学説史』第一巻のスミスを扱った部分の「労働能力そのものを直接に生産し，形成し，発展させ，維持し，再生産するような労働」[28]という表現と同様のものであり，労働力生産説を支持するかにみえる。

しかし，同時に引用しておいた部分とともに，問題文の主語である「それ」が「労働能力の維持に必要な生活手段の価値」であることを考えれば，そのような解釈はできないことがわかる。マルクスは当時（経済学批判ノート作成当時），資本の下にあるのではない教師の労働や医師の

労働の分析において，「商品としての労働そのもの」[29]だとか，それらの労働は「サーヴィスを物〔Sache〕として提供するのではなく，活動として提供する」[30]とか，「自分のサーヴィス（すなわち使用価値としての自分の労働）を貨幣と交換する」[31]とかの表現を使っているところがあり，ここでもそのような意味で言われていることがわかる。つまり，医師や教師の労働そのものを生活手段とみなしているわけである。しかしこれは青才高志が指摘する如く[32]，不正確であり，この領域でも生きた労働と対象化された労働との区別を厳密にすべきであると考える。これは「この領域での資本主義的生産のこれらいっさいの現象は，生産全体とくらべれば，とるに足りないものであるから，まったく考慮外におくことができる」[33]というマルクスの時代の歴史的制約によるのではなかろうか。

マルクスもこの少しあとでは次のように正確に述べている。

「労働そのものは，直接には商品ではない。商品はかならず対象化された，ある使用価値のなかになし加えられている労働である」[34]。

「身体を維持することに労働が限定されず，直接に労働能力そのものを変化させて一定の熟練を発揮できるところまで発達させる特殊的労働が必要であるかぎりでは，この労働もまた――複雑労働の場合と同様に――労働の価値のなかにはいるのであって，この場合には，労働能力の生産に支出された労働が，直接に労働者のなかに同化されているのである」[35]

ごらんのように，ここでは明確に生きた労働と対象化された労働との区別がなされ，後者の引用中の労働は明確に対象化された労働のことなのである。

さて次に第二の部面。ここではマルクスはまず経済学的な意味での生産的労働概念はただ資本制生産にとってのそれ以外でなく，だから「資本を生産する賃労働だけが生産的である」[36]ことを述べ，ここから不生産的労働とは「資本とではなく，直接に収入と，つまり賃金または利潤と交換される労働である」[37]ことが明言される。この規定から明らかなように，ある労働が生産的か否かはその「労働の素材的規定からではなく（労働生産物の性質からでもなければ，また具体的労働としての労働の規定性からでもなく），労働が実現される一定の社会的形態，社会的生産関係，からである」[38]。

かかる明確な概念規定の上にたって，マルクスは不生産的労働としての料理女や教師の労働等について分析し，そのような労働は「それの代価が支払われる財源を直接につくりだすものでないことは明らかである」[39]という。

ところで，生産的か否かは労働の素材的規定とは何の関係もないのだから，医師や教師の労働でさえ生産的労働ともなりうるとしてその例があげられ，それらがどの程度資本に包摂されるかが分析されるわけである。

人は往々にしてこうしたマルクスの分析手順を全く無視し，かつ労働の素材的規定にとらわれ，勝手な解釈をしているのである。

最後の場合における教師の労働については次のように述べられている。

「教師が他の教師とともにある学校に雇われて，この知識を商う学校の企業者の貨幣を自分の労働によって価値増殖するならば，彼は生産的労働者である」[40]。

「生産されるものが，生産される行為から不可分な場合。たとえば，すべての実演する芸術家，弁士，俳優，教師，医師，牧師，等々の場合。この場合にも，資本主義的生産様式は狭い範囲で

しか行なわれず，また，事柄の性質上，わずかな部面でしか行なわれない。たとえば教育施設の場合，教師は教育施設企業家のための単なる賃労働者でありうるし，また，この種の教育工場がイギリスには多く存在する。こうした教師は，生徒にたいしては生産的労働者ではないけれども，自分の企業家にたいしては生産的労働者である。企業家は自分の資本と教師の労働能力とを交換し，この過程を通してふところを肥やす」[41]。

資本の下に包摂された教師の労働は，価値―剰余価値を生みだすこと，それをもつ商品は,「知識」であり「生産する行為から不可分な」もの――つまり教育サービスであることが疑問の余地なく述べられている。

Ⅶ　生産的労働論争について

この論争の現実的根拠そのものが問題だ。本稿でこれを詳述することはできないが，論者らの精神様式に関連して述べておく。

第一に，論者は，Ⅴで分析したように，当該部門の労働者が，小商品生産者と同様の意識をもつ傾向がある点を全く自覚していない。しかも第二に，資本の下へのこれらの部門の実質的包摂が，そこでの諸独占の成立と巨大な近代公学校体制の成立，またそれ故に弱小資本ないし独立小商品生産者の厖大な層の形成とに照応しているが故に，かの独立小商品生産者たちの，また賃労働者化した擬似的なそれらの，独占資本に対する絶望的な反発や反抗が異常に激化する点を完全に見落とす。

更に第三に，以下述べる事態が，その視野からスッポリと抜け落ちる。

所謂非物的諸商品生産部門での独占の成立によって，あらゆる観念，イデオロギー，幻想等が商品化されうることから，今日の商品世界で，より一層「自由，平等，所有，およびベンタム」[42]の単純商品交換世界の仮象が強まり，拡大する。すなわち,「幻のような」[43]対象性たる商品価値が，自らを表示するためにかりざるをえないあれこれの具体的な商品体という種々の世俗的姿から，現実的にも〝離脱〟し，商品物神崇拝がより一層拡大し，かくて，商品世界で不断に垣間見ることのできるプロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立の亀裂が陰蔽され繕われることが多くなる。こうしてかの「小商品生産者」たちの意識がある意味でより普遍化する。

だが，それだけではない。教師の労働の場合，国家による近代公学校体制の組織化によって次の事柄が加わる。

近代公学校体制の成立によって，教師の生産する知識や規律等の教育サービスが，統一的に，一律に，その本来の購買者・消費者たる生徒に強制的に譲渡される関係が成立するという点である。だから教師は，今日の階級社会の秩序・権力作用そのものを直接に不断に再生産することとなる。このかぎりで，この「独立小商品生産者」は一種の「権力者」に〝高め〟られる。

以上の第一～第三の点に根拠をもつ一つの精神様式こそ，教師聖職論に他ならぬ。生産的労働論争は，自らの土俵たるこれらの点を全然批判の俎上にのせえなかった。まさしくこの点まで批判を遂行することこそこの論争の真の今日的課題であるにもかかわらず。

お　わ　り　に

本稿では資本の下に実質的に包摂された教師の労働について分析し，近代公学校体制下のそれ

については，生産的労働論争の論者らの精神様式に関する限りでふれたにすぎない。後者を十全に説くためには，Ⅶで示唆したように，近代公学校体制そのものをその成立から解明することを必要とする。これが次の課題となる。

註

1) 近代公教育体制でなく，この用語を用いたのは，我々の眼前にあるこの制度を把握するのにその方がより適切ではないかという仮説によっている。産業資本主義時代での学校体制の発展（助教法学校等），そして世界資本主義の帝国主義段階への移行に伴うその公学校体制への転変，というのが私の仮説である。
2) 資本の下への賃労働の形態的包摂及び実質的包摂についてはマルクス『直接的生産過程の諸結果』をみよ。この区分によって本稿の分析対象をみれば，産業資本主義時代ではなお形態的包摂から実質的包摂への過渡にあり，近代公学校体制の成立――帝国主義段階に到ってはじめて実質的包摂が完成されるとみるべきである。つまりここではこの部門での独占の成立と実質的包摂とが重なり合うわけである。
3) マルクス『資本論』第一巻青木書店版第二分冊 p. 804
4) 例えば岡村達雄はしきりと「公」教育労働としての教育労働なることを強調するが，氏の『教育労働論』（明治図書 '76年）のこの分析にあてられた第一部第四章は，経済学的には全くの混乱の糸玉である。
5) 赤堀邦雄『価値論と生産的労働』（三一書房，'71年）p. 74をみよ。
6) 同前 p. 106「マルクスの言う価値の実体としての『抽象的人間労働』と『社会的労働』とは同じものである。それは商品を生産する労働の，具体的有用的性格を捨象した，その意味で抽象的性格の人間労働であり，個別的具体的性格をはなれた社会的一般的総労働の一断片としての労働のことである」
7)8) マルクス『直接的生産過程の諸結果』国民文庫 p. 118
9) 金子ハルオ『生産的労働と国民所得』（日本評論社，'66年），芝田進午『現代の精神的労働』（三一書房，'62年），『教育労働の理論』（青木書店，'75年）をみよ。
10) ただしマルクスは「第四の物質的生産部面」(eine vierte Sphäre der materiellen Produktion) があるとして，運輸業をあげ（『剰余価値学説史』第一巻『全集』第二六巻の① p. 525），「労働対象に物質的変化〔materiellen Veränderung〕――空間的，場所的変化――がひき起こされる」（同）と述べている。他方，教師や医師の労働等においては「非物質的生産」(nichtmateriellen Produktion) という用語を使っており，この区別を踏えて本稿でも区別をつけた（Ⅴをみよ）。
11) マルクス『経済学批判要綱・Ⅲ』（大月書店）p. 421
12) 赤堀前出書 p. 15
13) 同前
14) 同前 p. 73
15) マルクス『剰余価値学説史』前出 p. 186
16) 同前
17) マルクス『資本論』前出第一分冊 p. 331
18) 註10）を見よ。
19) この点で運輸業等との相違が決定的となる
20) マルクス『経済学批判要綱 Ⅲ』前出 p. 407
21) マルクス『資本論』前出 p. 331をみよ。
22) 同前第二分冊 p. 804
23) 芝田前出 p. 12
24)25) マルクス『資本論』前出 p. 341
26) マルクス『経済学批判（ノート）―1861～1863年草稿』邦訳『資本論草稿集 4 』p. 62
27) 同前 pp. 63～64
28) マルクス『剰余価値学説史』前出 p. 187
29) 同前 p. 511
30) 同前 p. 517
31) マルクス『直接的生産過程の諸結果』前出 p. 115

32) 青才高志「価値形成労働について」『経済評論』'77年9月号。ただ青才が労働そのものではなく，労働力を売るのだと言っている点は正確さを欠くと思う。今日の社会では結果としてそうであるとはいえ，ここで問題なのは，生きた労働と商品で表示された労働との区別にある。青才のように言ってしまうとマルクスの「このサービスの価値がどのように規制されるか，また，この価値そのものが労賃の諸法則によってどのように規定されるかは（中略）労賃に関する」(『剰余価値学説史』 前出 p. 514) 問題だという提起をきちんと評価しえなくなる。

33) マルクス『剰余価値学説史』前出 p. 523

34)35) マルクス『経済学批判（ノート)』前出 p. 72, 73。尚，35)の引用文中，「同化される」とは，所謂非物的諸商品が生産的に消費されたことを意味する。

36) マルクス『剰余価値学説史』前出 p. 160

37) 同前 p. 167

38) 同前

39) 同前 p. 181

40) マルクス『直接的生産過程の諸結果』前出 p. 119

41) マルクス『剰余価値学説史』前出 pp. 522～523

42) マルクス『資本論』前出 p. 327

43) 同前 p. 119

〈付記〉

本稿提出後，本稿の分析手順が誤っていると確信するにいたったので付記する。

本稿が分析対象としている学校資本及びその下での教師の労働は，近代公学校体制を明らかにした上で説くべきであり，その意味で本稿は根本的に転倒されねばならない。本稿では，近代公学校体制の批判的解明のための部分的で予備的な作業があたかも全体的なものであるかのように展開されてしまっている。現実には，学校資本の下での教師の労働でさえ本稿で分析した以上のものであることが隠蔽されてしまっているのである。

（本研究科博士後期課程）